ツバキの奇品‘金魚椿’に関する若干の知見

江戸椿研究会　　野口慎一

はじめに

金魚椿の初見は、摂津東山村　吉衛門著『諸色花形帳』(1789) と考えられますが、その具体的な実体が明らかになるのはそのおよそ 70 年後で、図が登載された江戸青山、植木屋金太著『草木奇品家雅見』(1827) であろうと思われます。この 30 年ほど後には、粕屋亀五郎編『椿伊呂波名寄色附』(1859) が成立し、その末尾部分の葉替之分に‘錦魚椿’の雅名と共に「紅一重小輪」とする金魚椿とは別個体品種（？）が出現しています。(この原本はこれを書き写した竹清氏によると、いろは順の本編部分といろは順ではなく乱雑に名前が並べられていた部分がありました。竹清氏はこの部分を「追補」であろうと言っています。この追補部分は同氏によって、いろは順に並びかえられて写されています。その後ろにさらに全く別のまとめ方の部分があります。つまりいろは順ではなく八重、牡丹咲、早咲、千重、新花之分などに分類記述された部分です。いわば追補のさらにその追補と見る事のできる、分類記述部分の葉替之分の中に初めて錦魚椿が出てくる訳です。竹清氏が書き写し終えたのが昭和 5 年となっています。このようなことから冒頭本編部分以外は成立年が後になると考えられます。なお、粕屋の粕の文字は粉と読む研究者も糀と読む研究者もあります。)

さて、いずれにしろ、現在、金魚椿が初めて記載されてから 200 年以上の歳月を経たことになり、いくつもの金魚椿類似品種が、‘金魚椿’の品種名の下で一括りにされて来た可能性があります。また金魚椿や錦魚椿が無造作に使用され混用されて現在に至っています。これらの点つまり集合名詞なのか固有名詞なのか、また‘金魚椿’と‘錦魚椿’のどちらがどちらなのかは、椿研究の先達もほとんど看過した感があるのです。著者はここに大きな問題があると思うのです。

江戸椿のような、古典的な品種の古木については戦後いくつもの報告があり知られてきました。しかし金魚椿やこの類似品種については、後述する上原敬二氏が言及した記録が僅かに知られるのみでしょう。

そこで筆者は、金魚椿に関する古文献を比較して来歴や品種名（雅名）などについて考察し、また更に金魚椿の古木に関するフィールドワークでは貴重な知見を得たので本小稿で報告したいと思います。

なお、本稿をまとめるに当り、清徳寺の博厳和尚、開光院の繁宗和尚には調査の際には格別のご配慮を賜りました。横内茂氏には時代考証などについて貴重なご指導を賜わりました。また、故中村恒雄氏には種々ご教示を賜りました。ここに記して各位に厚くお礼を申し上げます。

‘左内出金魚つばき’と‘北沢金魚’

‘金魚椿’のその具体的な実像は写生図が描かれている『草木奇品家雅見』（前出）にある‘左内出金魚つばき’でしょう。この金魚椿には、「その葉金魚のことし実に不思議の珍産なり」とする本書著者の感想が付記され

（資料

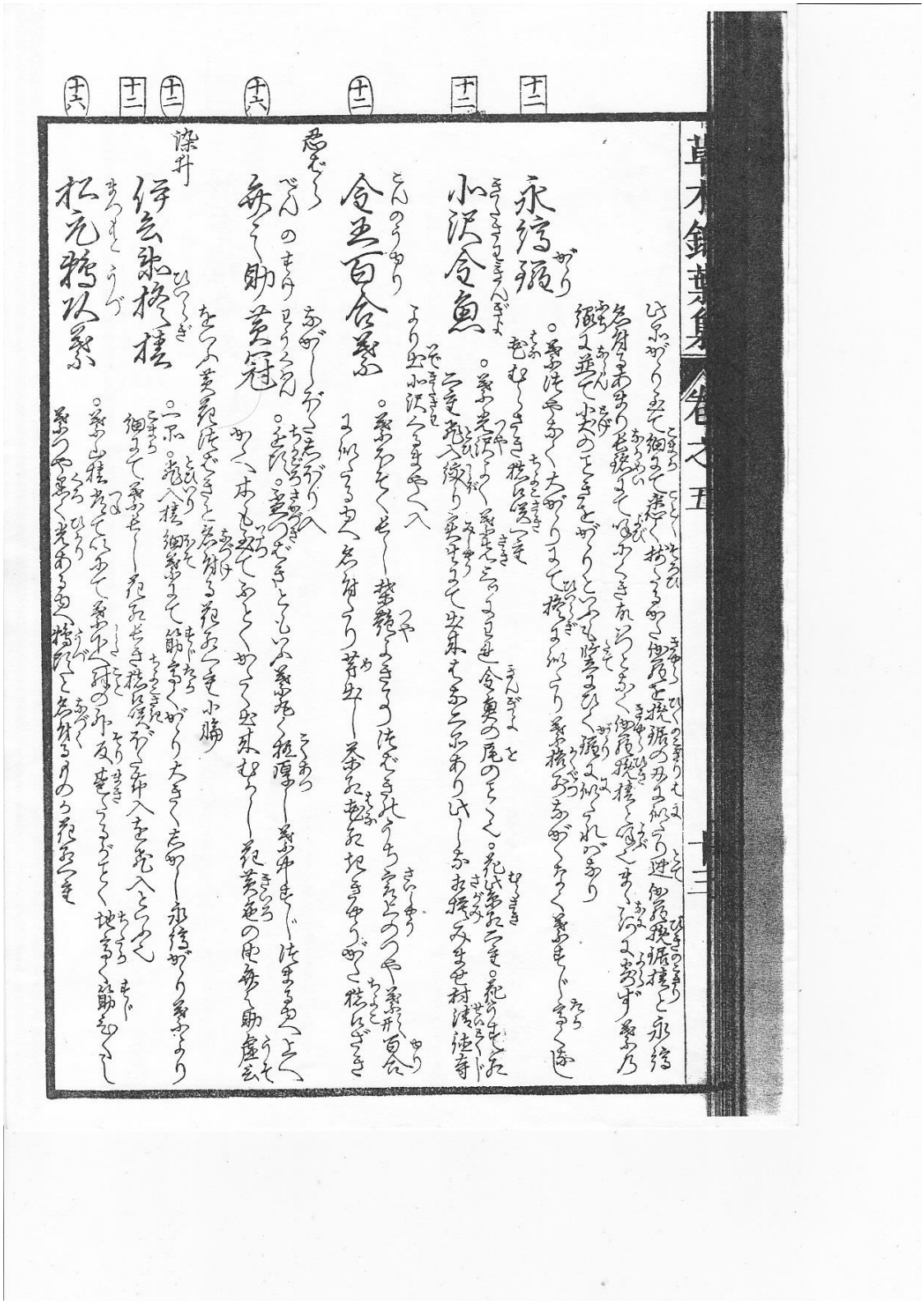
１）、葉先が明瞭に３分した、さながら和金の三つ尾を連想させる形を呈しています。

本書は、観葉に重点の置かれた書物ですから花の解説はありません。取り立てていうほどの花では無かったとも考えられます。本書復刻本の解説書（1976）の中で横井政人氏らは、「左内出金魚つばき」の花を、ごく普通の一重咲のヤマツバキ形の花であろうと推定しています。しかし、兄弟本ともいえる旗本、水野忠暁著『草木錦葉集』（1829）を見直してみると本書の「北沢金魚」の図は『草木奇品家雅見』の「左内出金魚つばき」と全く同じ図を使用していることが分かります。左内氏は北沢の名主であるという説明が『草木奇品家雅見』の記述にあります。このことから、筆者は「北沢金魚」と「左内出金魚つばき」は全く同一品種ではないかと推定するに至りました。

さらに『草木錦葉集』の‘北沢金魚’の説明を一読すると、この品種は、重弁咲の栽培品種であることが分かります。原文には、

> 葉光沢よく　葉先三ツにわれ金魚の尾のことく也　〇花紫紅二重　〇花うす紅二重飛入絞り実生にて出来はな二品あり此のしな相模みませ村清徳寺より出北沢くるまやへ入

とあります



（資料　2）。初めて図示された‘左内出金魚つばき’は、ただのヤマツバキの変わりものではなかったようです。

椿の部 80 品の内 70 番目（便宜上著者が付与した通し番号）‘北沢金魚’は実生で出来た 2 品種の内の 1 品のようです。2 品ありと言っているのに図は一つです。同一図の使い回しまであるのだから、こんなものかと思いました。と言うのは、49 番目の‘窪多出金魚青布’と 59 番目の‘九兵衛更紗金魚’は布柄だけを差し替えて全く同じ図を使い回しているからです。また、水野氏が絶賛している 29 番目の‘栄治金魚黄布’についても、その班（＝布）の出方について「未然とは見定めず」などと言っておおらかな所があるからです。

それにしても全く花が異なる 2 品種であるならば、葉姿が同じであるはずがないのに、一枚の図しか準備されていないのは合点が行きません。しかも「葉のつやよし」などと具体的な説明が記されているのに、実生で･･･花は 2 品種で同じ花形の二重なのか・・・。そうだ‘染川’と‘墨染’だ、そうゆうことかと気がついた次第です。つまり、この 2 品種が枝変わりであれば、葉姿は全く同じですから図は一枚でよいことになります。葉の説明も他に要らない訳です。枝変わりによって出来た二品種か、あるいは二色の花が咲き分ける品種であるということを、同一の図を使用することで示しているということになります。

そう考えると同じ図の使い回しも意味があることだと説明できます。‘窪多出金魚青茶布’と‘九兵衛更紗金魚’は、葉の位置も数も形も全く同じ図を使用したのは、お互いが布入りの枝変わり関係にあることが分かっているという意図が有って、あえて同一図を使用している、ということになるのではないでしょうか。班の形だけ入れ替えているのは手抜きではなかった可能性があるのです。筆者はこのように考えました。（相関図表参照）

しかしそうだとしても「北沢金魚つばきなり」と記述される‘窪多出金魚青茶布’の葉は‘北沢金魚’の葉に比べると形が少し細く変わっています。葉形が枝替わりによって細く変化することはありえないとは言い切れないことです。そうであるとしても、班によって葉が細くなった例は‘小紅葉’と‘覆輪一休’、‘西王母’と‘西王母侘助’の例がありますが、何れも覆輪系の班であり，本班や更紗班（バイラス）に起因したものは知られていない極珍しい現象です。

以上のように、多少疑問は残るものの、このように考えると、これらの本に記載される 6 品種は、記述と図で多くが繋がっていることになりそうです。唯一、記述も図も‘栄治金魚黄布’が他品種とは無関係に独立しています。また、記述の内容からもう一品種、‘清徳寺出椿’は実生親としての別の品種と考えられます。‘北沢金魚（左内出金魚つばき）’は、特定の個体を指すものではなく、北沢の住人左内氏に関係する幾つもの金魚を総称的にいうこともあったのかも知れません。ともあれ‘北沢金魚’（群）を生んだとされる‘清徳寺出の椿’は歴史的な椿だと言うことが出来そうです。

清徳寺出の椿

筆者は、言わば本‘金魚椿’ともいうべき幻の椿を求めて、清徳寺を訪ね調査を行いました。はたして「清徳寺より出」の古木は存命し、このお寺で大切に育てられていたのです。

甘露山清徳寺（神奈川県愛甲群愛川町三増）は、平安時代の後期の応徳元年（1084）、高

野山の僧真海和尚により創立された真言宗の古刹です。山門を入って 10mほど進むと真っ直ぐ本堂に向かう階段があります。この急な階段を避けるように右へ小さな坂道が回り道となっています。この小さな小道の中ほど正面に問題の金魚椿は立っています

（写真１）。

積み石で囲われていて小高くなった所に根元を露にしています

（写真２）。地際の肥大した根部の 50ｃｍぐらい上で周囲 140ｃｍ以上、まっすぐ伸びている幹は目通りの周囲で 122.8ｃｍほどありました（平成 30 年（2018）6 月 27 日測定)。高さは、全景写真から見るとおよそ 11m以上あるでしょう。

花はヤマツバキ形のごく普通の花色で、落花を測ると花径は約 7.5ｃｍ

（写真３）。下枝は全く無いので見上げて良く見ないとそれと気づかないでしょう。紛れもなく葉先は３分裂しています。葉身は狭卵形で基部は広いくさび形、金魚の尾の部分が小さ目のものや燕尾の葉もあり、普通の葉の枝もあり、厚く平らな葉姿は素朴な感じがします。はたして清徳寺の椿はやはり金魚椿だったのです

（写真４，５）。

ご住職の博厳和尚はこの金魚椿について詳しいことは聞いていないとのことでした。根元に先代の建てた、《神奈川県最古の金魚椿》と書かれた石碑があるのですが、この椿がどのぐらい古いのかもよくわからないと言われます。この金魚椿について、ご当代は清徳寺の名前が江戸時代の椿の古文献に書かれていることもご存じありませんでした。

平成 26 年（2014）7 月 1 日に測った時は、目通り 121ｃｍでした。まる 4 年で 1.8ｃｍ太くなっています。1 年で 4.5ｍｍ太ったことになりますから、計算すると樹齢は約 273 歳、

1745 年生まれと推定できます。『草木錦葉集』に記された時、この椿は 84 歳の壮齢樹であったと推定され、その当時から金魚の葉をぐんぐん伸ばして花もたくさん咲かせていたことが想像できます。

《神奈川県最古》と石碑にあるというのは、国の外の何処かから運ばれてきた金魚椿が相模三増村に植えられた、という意味なのでしょうか。そして、この金魚椿が相模国に入った最初の一本だったのか、あるいは残った最後の 1 本なのでしょう。清徳寺の金魚椿は、地上に見えている根部の状態から見て、実生品であるとしても何回か移植されたか、あるいは挿し木されたもののようにも筆者には見えます。この植物学的にみても特異な存在である不思議な椿がどうしてこの地にあるのでしょうか。またどのような経緯で北沢（「車屋平蔵北沢の農家なり」）にもたらされたのでしょうか、興味は尽きません。

『草木錦葉集』では、清徳寺の椿そのものが金魚葉を持つ椿かどうか明確に記されてはいませんでした。また筆者の調査によって、‘清徳寺金魚椿’が‘北沢金魚’と同じ花ではない一重の花であることが確かめられました。

以上の点から、『草木錦葉集』の記述内容を補正し、さらに事実をより正確に知ることが出来た次第です。

‘開光院の金魚椿’の来歴

上原敬二著『樹木大図説』巻 3（1961）には、別の古木金魚椿について記され、「東京都五日市市の開光院の中庭には四代の住職方叔和尚の植えた 200 年生の老木がある」と報告されています。そこで筆者は、この記述を元に開光院（現在あきる野市五日市）を訪れ、種々の調査をさせて頂きました。

開光院は、開創文安五年（1448）臨済宗建長寺派の古刹です。本院の立派な山門をくぐって正面前方に若木がありますがこれは後に植えられた実生個体と伺いました。問題の老木は山門をくぐってすぐ右にありました。残念なことに以前から樹勢が少しずつ弱ってきていたのだそうですが、とうとう上部が完全に枯れたために切り倒されて、半ば切り株のようになっていました

（写真 6　平成 26 年（2014）7 月 1 日撮影）。幹は小さな枝の上部で切り取られていて、根元から何本ものひこばえが伸び出しています。北側から見ると古木は双幹で伸びていたもので、地面から 20ｃｍの高さで幅が約 46ｃｍ、幹回りは 136ｃｍでした。両方の幹ともかなり前から半枯れ状態であったことがわかります。主幹切断部（左）で広い方の幅が 33ｃｍ、副幹（右）で幅 25ｃｍの老木は、古い傷から肉が大きく盛り上がって回復しようとしていた跡がみられます。

花は残された小枝にやっと二輪をつけていました

（写真 7　平成 27 年（2015）4 月 10 日撮影）。やや濃い紅色のヤマツバキ形の小輪です。葉身は狭卵形で、どの葉もよく金魚葉になっています。尾部の付け根もしまっていて端正

な葉姿

（写真　8）です（この金魚椿の葉裏にも細かい毛が生えていることがあり、金魚椿の成立に関わる重要な形質ではないかと筆者は注目しています)。

開光院の当代ご住職・繁宗和尚は、先述の『樹木大図説』に開光院のことが書かれていることも、この椿についての由来のことも知らなかったと言われます。筆者がこのことを話して由来について尋ねると、四世の没年であればすぐに調べられるということで教えていただきました。和尚によると四世は方叔和尚ではなく継岳和尚で天正 15 年（1587）に亡くなっているそうです。また、方叔和尚は二十一世で明治 20 年（1887）が没年であると言います。上原氏の報告は少し間違っているようです。筆者は、『樹木大図説』の取材、聞き取りが何時のことかはっきり分かりませんが、四代ではなく、「四代前の方叔和尚が植えた」ということではないかと推測しました。

さて、この金魚椿が『樹木大図説』の出版時（1961）に 200 歳であったとすれば、この木は 1761 年生まれということになるわけです。ですから、方叔和尚が植えたのがいつのことかはわかりませんが、亡くなった年に植えたとするとその当時 126 歳、若い時に植えたとしても相当大きな木であったことに成ります。ともあれ方叔和尚は、何処かで可愛らしい葉を広げて育っていたこの金魚椿を見付け、大変気に入っていたことが想像出来ることでしょう。

『椿花集』の‘金魚椿’

『草木錦葉集』の錦葉とは、斑入りの葉を意味する言葉です。斑入り植物の愛好家が斑葉（阿部喜任著『草木育種後編』（1825））を美化して言った言葉が錦葉でしょう。錦の文字を使うのは黄覆輪を金辺、白覆輪を銀辺などと言っていたからです。（今でも東洋ランには金陵辺の名前がのこっています。班と斑は同意別字）

時代が下って、東京、駒込、伊藤小右ヱ門他編『椿花集』（1879　番付表風名鑑で園芸家

のカタログとして作られた）で‘錦魚椿’という品種名が使われています。類似の名前の別の新品種として錦の文字を用いたとは考え難く、錦葉の金魚椿という意味のある造語であると考えてのこととしましょう。『椿花集』では‘班入錦魚椿’としなければいけないところを間違って『班入錦臭椿』となっていますが、おそらく、崩し字の字体によっては魚の文字が臭という字に似ているので読み間違えたのでしょう。

青葉品はそのまま‘金魚椿’とすればよかったものをこれも『錦魚椿』としてしまいました。著者は理由があっての事ならばこのような次第であろうと推察します。

錦の文字は植物の愛好家ならば班入りを意味することは承知していたはずです。無地青葉の金魚椿に、先に前もって‘錦魚椿’というように名付けるというのでは意味が通らないと思うのです。

さて、次に述べるように、‘錦魚椿’はいくつもの別個体品種が想定出来ます。一般にツバキの本班品種や更紗班品種などは不安定でしばしば班が抜けて青葉品に変わってしまいます。金魚椿の場合、班抜け個体でも十分に珍しいのですから、特に捨てられることも無く普通に‘金魚椿’として栽培され続けて来たはずです。また、金魚椿は『草木錦葉集』にあるように実生で引き継がれる形質です。しかも、古典品種に花の説明があるものは稀で、多くが普通の一重のヤマツバキ形の花と想定されていますが、どのような素性のものであっても、班抜け個体でも実生個体でも、ただの‘金魚椿’として、花が多少違っていたとしても流通するでしょう。葉が金魚葉を出す個体であるならば、何の問題にもならないからです。班入品も青葉品から出来た可能性もあります

青葉品に錦の文字を用いることが『草木錦葉集』に載っているから錦魚椿と書くのだろうと単純に誤解しただけだと考える事も出来ます。『椿伊呂波名寄色附』はそのようなもので、それが不用意に踏襲されたとしても、『椿花集』で四人の農園主の一致したブランド品種名であったと考えても、実物は前の時代から伝わって来た金魚椿であることは間違いないでしょう。

園芸農家のカタログの中に‘錦魚椿’があるということは事実です。しかしその‘錦魚椿’をある一個体であると同定すること（固有名詞）（津山尚著『日本椿集』(1966)）は無理があります。その花の大きさを見ても、『椿花集』以後の‘錦魚椿’は「小リン」（相関図表　⑧⑨⑩⑪）であったものが、『新撰椿花集』(1949 ）では「小中輪」（相関図表　⑫），『新撰椿花集』(1957　活字版)では「中輪」となっています。班が抜けると花が小さくなり班が入ると花が大きくなるということは無いわけですからそれぞれ別の個体と考えられます。

結びに代えて

清徳寺の金魚椿の推定される樹齢を信じれば、『諸色花形帳』の時この個体はほぼ 44 歳になるという計算から、これこそが同書の‘金魚椿’であるということができるでしょう。もっとも、16 歳しか樹齢の離れていない開光院の金魚椿もその当時 28 年生だったのですか

ら、十分にその該当品種であることには変わりはありません。これらの金魚椿は同じ品種（個体）ではありませんでした。これらは本調査結果のように紅色の花であり、現在最も一般的といわれる桃色花の金魚椿（『草木奇品家雅見解説』（前出 1976））とも個体が違っています。

著者は誰よりもいち早く『ツバキとサザンカ』（1965）を出版し、現在の椿愛好家の共通の師であった、埼玉県植物見本園（現、花と緑の振興センター）の元職員、故中村恒雄氏に倣いたいと思いす。集合名詞として金魚（椿）や金魚葉（椿）を採用した方々に従うべきだと思います。日本ツバキ協会発足時の立役者である石井勇義氏も金魚葉を採用したと聞きました。園芸家が‘錦魚椿’のブランド名を復活させるようなことがあったとしても、金魚は金魚ですし、金魚の葉は金魚葉だと思います。錦魚葉では意味がわかりません。金魚を錦魚としなければならない理由がみつかりません。偉大な園芸家達であったとしても、作出者でもない人のプライオリティーに反するような文字使いを真似る必要はないと思います。そして、現実に、『椿花集』以前の金魚椿が保存され栽培され続けているのです。

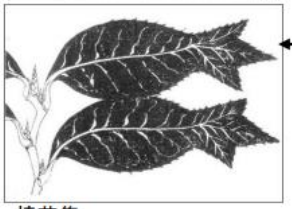
さて、筆者は、金魚椿の実生観察で多子葉を持つ実生が見られることや、葉裏面に茸毛を宿存させる形態学的な特徴が新旧系統を問わず見られることが多いことから、金魚椿はその植物学的に不思議な葉の形と共に、これらの遺伝的形質を維持しながら分化、発展してきた可能性が高いという考えを持っています。筆者が観察の結果知見したこの現象は、本小稿の考えの糧となるべきものであるということも出来ます。筆者が調査した 2 本の古木は金魚椿の元始的な実体と言えるでしょう。その意味でも最も古いと思われる系統の金魚椿を観察することができたことは幸いでした。筆者の金魚椿への思いは、さらに強くなった次第です。

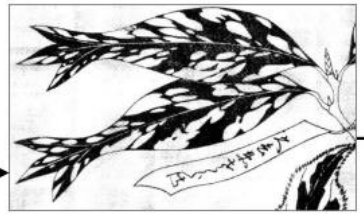
なお、この小稿は何よりもそれぞれの寺院のご協力を得て出来上がったものです。言うまでも無いことですが、読者諸氏には、この小稿の公表によって関係する古刹やその関係各位にご迷惑となることのないようにお願いいたします。

2018.10.1現在

金魚椿の知見　相関図表

出典	品名	原本記述及び著者解説等
諸色花形帖 （東山村吉衛門著　1789）	① 金魚椿	「葉金魚ノ如シ三ツニワレ名ニ（①の1）又サラサモ有（①の2）」（231年前）
草木奇品家雅見 （金太著　1827）	② 左内出金魚つばき ③ さらさ金魚つばき	205図 「その葉金魚のごとし実に不思議の珎産なり」 368図　記述なし　⑥と同図　バイラス斑
草木錦葉集 （水野忠暁著　1829）	④ 栄次金魚黄布	椿の類29番（黄布之部)「芽出しうすく紅かけ布の色薄く出段々上布になる蔭にては布に少し青み出る事有べし未だ慥には見定めず椿布珎物の内随一の品」　（番号は便宜的に付けた通し番号）
	⑤ 窪多出金魚青茶布	同49番（黄布之部）「北沢金魚つばきなり布青茶色にて見ぐるしき品なれど珎物なり」⑤は③と同図（枝変わり品）記述によると⑦（＝②）の枝変わり
	⑥ 久兵衛更紗金魚	同59番（砂子布之部）「芽出し虎布出後くもるこの持主隠者となり上総に住し草木の手入れ巧者ゆえ田畑のやしないを勘考して野人へ専らをしえなどして居」
	⑦ 北沢金魚	同76番（葉替之部）一図だけ②と同図。「紫紅二重（⑦-1）薄色飛入二重（⑦-2）清徳寺出くるまや入（⑦-3）」
		②と⑦の1と⑦の2は同品、⑤と⑥は同系品④は別個品⑦の3も別個品③と⑥は同品
椿花集 （伊藤小衛門ら出版　1879）	⑧ 錦魚椿 ⑨ 斑入錦臭椿 ⑩ 更紗同断	葉替之部8番「紅一重小リン」　斑抜け品の混合？ 斑入之部1番「紅一重小リン」　本斑④と同品と推定　斑と斑は別字 同2番　「紅一重小リン」　バイラス斑　⑥と同種と推定 ⑧と⑨と⑩は同系品または斑抜け品
新撰椿花集 （皆川治助出版　1949年版）	⑪ 錦魚椿 ⑫ 斑入錦魚椿	葉替之部5番　「紅一重小輪」　⑧と同品　斑ぬけ品混合？ 斑入之部1番　「紅一重小中輪」　⑨とは別品　⑩とも別品　バイラス斑
同（活字版　1957年版）	⑬ 斑入錦魚椿	同　「紅一重中輪」　3つ目の斑入錦魚椿 ⑪と⑫と⑬それぞれ別個体　斑入は本斑のこと。 ⑫⑬は更紗斑で斑入と誤認、取り違えている（更紗金魚を絶種としている）。





細葉型（図は草木錦葉集よりコピー）斑の異なる同一個体、枝変わり品関係と推定。同図形別斑（同図版）ラベルの位置を付け替えている。

○現存品

⑦の3 → ○ 清徳寺金魚椿　推定273歳　やや広葉　形蘭鋳葉未見　花　紅一重中輪。

○ 方叔植金魚椿（開光院）伝257歳　花紅一重小輪やや細葉　蘭鋳葉未見

○ 日本椿集（二口善雄画　1965　紅一重中大輪花雄蕊黒化蘭鋳葉有）など園芸書にある所の概ね「花紅一重小輪」の金魚椿が世間に何品種有るのか不明。それぞれを同定するのは難しい。

○ 桃色中輪花（赤花キンギョ　草木奇品家雅見解説　1976）最も個体数が多いというこの品について新撰椿花集の品種のどれかであるとすれば、花が大きいので⑬の斑抜け品の可能性あり。同園の作出品種とは聞いていない。川口市安行付近に金魚椿の古木を見た人はいない。

（記）俗に赤花金魚などというが、赤花や紅花は白ではないという意味でつかわれる。また葉にバイラスがはいると白くボツボツが出るなどという。樹木大図説の「椿花集には紅一重小中輪の斑入錦魚椿というのが記されているこの斑は白である」という報告は確認出来なかった。小中輪とあるのは新撰椿花集の記述で、「この斑は白である」はバイラス斑をこう言ったものかと思う。
金魚椿の斑入り品でバイラス斑以外のものを見た人を知らない。一園芸品種として‘錦魚椿’を研究者が同定したとしても現実的ではない。

江戸椿研究会委員